

Eighth International Conference on Development of Drylands に参加して

阿 部 淳

東京大学大学院農学生命科学研究科

2006年2月25日-28日に中国北京市の友誼賓館において開催された標記の会議に、鳥取大学乾燥地研究センターの拠点大学交流事業（日本学術振興会）の一環として参加した。砂漠化防止と緑化、限られた水資源での効率的かつ持続的な生産を目指して、土壌、水利、植物（森林作物）、動物（家畜）、社会経済など多様な視点からの研究発表が行われた。参加者数は400人程度かと思われる。中国に加えてイランからの参加者が大変に多く、そのほか、チュニジア・エジプトなど北アフリカ・中東の国々、ウズベキスタン・カザフなど中央アジアの旧ソ連圏、インド、日本からの参加者が多かった。

3日間に、全体会議での12題の講演をはじめ、1. Soil and water conservation and degradation (36題)； 2. Dust-storm process (18題)； 3. Range management (10題)； 4. Forage and livestock production (6題)； 5. Biodiversity and ethnobotany (5題)； 6. Stress physiology (19題)； 7. Renewable energy (5題)； 8. Indigenous/traditional knowledge and heritage (6題)； 9. Sustainable development of oasis, desert communities and socioeconomic studies, and role of non-governmental organizations (31題)； 10. Application of new technologies and technology transfer, crop improvement for dry areas (40題)の10セッション構成で口頭発表が行われ、さらにポスター発表は夜8時-10時(!)という、盛りだくさんの会議となった。口頭発表は5会場での同時進行のため少人数で、異なる分野間ではもちろん、相互に関連の深い研究テーマでも分断されて、主催者が目的のひとつに掲げた多様な分野間の協力という観点からは疑問が残った。しかし、その分、多くの発表があり、様々な地域の状況に密着した研究事例を知ることができた。根を直接取り上げた研究は少なかったが、灌漑や施肥、作物の水利用効率など関わりのある発表が多く参考になった。また、そうした現場のデータに、既存のモデル理論の適用を

試みた研究も多かった。発表や質疑での話しぶりにもお国柄が反映され、時間を気にして何度も止めに入る座長をそっちのけで、わいわいと客席の皆で議論が盛り上がった会場もあつたりして、大変楽しくかつ有意義であった。全体会議でも、生物燃料 (bio-fuel) の原料として、子実に30%の油分を含み、荒廃地でも多年にわたってそれなりの収量が確保できる植物 (*Jatropha curcas* L.) の紹介など、こうした分野の会議ならではの話題があった。

この会議は、国際農業研究協議グループ (CGIAR) の International Center for Agricultural Research in the Dry Areas (ICARDA；所在地シリア・アラブ共和国) と中国科学院の寒区旱区環境与工程研究所が中心となり、さらに鳥取大学乾燥地研究センターや国連大学など5機関が共催した。会期中にプログラムが変更されるなどおおらかな面もあったが、事前登録等の実務は中国科学院の国際交流部門の専任スタッフが支援に当たったようで、問い合わせへの回答も迅速で、信頼性が高かった。会場の友誼賓館は学术交流のための宿泊・会議に使われることが多い。多くの大学が集まる文教地区にあるため、かつて日本に留学し一緒に学んだ旧知の中国人研究者とも、久闊を叙することができた。